

ビルや道路で分断された緑地を、木と草で覆われた緑道でつなぐことでチョウの種や個体数が維持される。東京都市大学環境情報学部（横浜市都筑区）の調査で、緑道が生態系を豊かにする役割も果たしていることが分かった。

移動し生態系も豊かに

調査は、小堀洋美教授（保全生物学）研究室の学生らが昨年8～9月に行った。住宅地「港北ニュータウン」の一角にあるキャンパス周辺の緑道と公園、大学構内で計1484匹のチョウを捕獲し、識別番号をつけて放した。

再捕獲したチョウの移動跡を分析したところ、緑道沿いに活発に移動している様子が確認された。緑道に直接つながる徳生公園で捕獲した248匹は、うち16匹が公園外で見つかった。1匹以上離れた大学構内へも飛来していた。

一方、緑道から約1000メートル離れた山崎公園では106匹のうち外に出た個体は3匹だけだった。チョウは気候や植生の変化に敏感で、自然の豊かさ

を示す指標生物とされる。孤立した緑地では環境悪化の影響を受けやすいが移動できれば生存の可能性は高まり、繁殖機会も増える。小堀教授は「緑道があることでチョウの移動性が高まり、絶滅回避や個体数維持にも役立つ」と評価する。

港北ニュータウンの周辺ではかつて60種近いチョウが観察されたが、開発が進んだ1950年代に急減。しかし緑道が整備され始めた74年から40種前後で横ばいになったという。

同大では5年前、構内に約7四方の畑をつくり、幼虫が食べるかんきつ系の木や草、成虫が蜜を求める種の花などを植えた。当時はチョウが1種も確認できなかったが、現在は他の緑地や緑道から移動してきたとみられる約30種が観察できるようになった。小堀教授は「個々の緑地は小さくても、お互いを結びつけば地域全体の生態系は豊かになる。この研究を街づくりに生かしてほしい」と話している。（古沢範英）

緑道つなぎチョウ育つ

東京都市大が港北ニュータウンで調査



チョウの通り道になっている緑道＝横浜市都筑区

